

恵泉 樹の文化史(2)

ヤマブキ

宮内 泰之(園芸文化研究所)

1. はじめに

ヤマブキ (*Kerria japonica*) はバラ科に属する落葉低木である。北海道南部から九州までのほぼ日本全国に自生するほか、中国にも分布している。その生育環境は、山地の谷川沿いなどの湿ったところを中心としている。花期は4-5月で(関東地方)、サクラ前線を追いかけるように日本列島を北上する。かつては多くの園芸品種があったそうだが現在ではほとんどみられず、花弁が八重になったヤエヤマブキ (f. *plena*)、花弁が白っぽいシロバナヤマブキ (f. *albescens*)、花弁が細く多いキクザキヤマブキ (f. *stellata*) などがある。実際には、道脇の斜面など、湿ったところに限らず、低山地、丘陵地にふつうにみられる植物である。また、現在では、庭木、公園樹として広く植栽されている。

2. ヤマブキと古代日本人とのかかわり

『万葉集巻二』に、高市皇子の作として次のような歌がある。

山振の立ちよそいたる山清水汲みに行かめど道の知らなく

高市皇子は天武天皇の子で、先の歌は異母妹の十市皇女の死に際して作った三首のうちの一首である。この歌の意味は、ヤマブキ(山振)の花が

ほとりに美しく咲いている山の泉の水を汲みに行こうとするが、どう通って行ったらよいか、その道がわからない、というものである。さらに付け加えると、ヤマブキの黄色い花が咲き飾っている山の泉を黄泉の国にかけて、黄泉の国まで訪ねて行きたいが、その行く道がわからない、と解釈することができる。ヤマブキの黄色い花が鮮やかに思いおこされる、優れた一首である。しかし、ここではヤマブキと山の泉との関連を詠み込んだ作者の自然に対する観察眼に着目したい。ただし、観察眼というほどの大げさなものではない。古人にとってはごく身近な自然の情景を用いて歌を詠んだだけのことであろう。しかし、現代ではヤマブキと水とのかかわりが意識されることは少なくなっているようである。前述のとおり、ヤマブキは湿ったところを好む植物である。庭や公園には水辺にももちろん植えられているが、それ以外のところでもふつうに植えられている。水辺でなくても健全に生育するのだし、きれいな花を觀賞するだけであれば、必ずしも水辺に限定する必要はないだろう。しかし、ヤマブキの花や緑と水辺とを一体のものとしてとらえていた古代の日本人の自然観に、現代の緑化とそれを享受する私たちが教わる点が多い。

3. ヤマブキの利用

古代の日本人はヤマブキをどのように利用していたのであろうか。『万葉集巻十九』に大伴家持の作として、次のような歌がある。

繁山の 谷べに生ふる 山吹を 屋戸に引き植ゑて…

作者は野山の谷からヤマブキを掘り取ってきて、自邸に植えていたようである。ヤマブキに限らず、手ごろな花木は同じようにして庭に持ち込まれていたのであろう。

平安時代初期の作と推測される『宇津保物語』には、

藤壺のおはする町はいと面白し。遣水の程に八重山吹の高く面白き咲き

出でたり。

と記され、遣水(庭園内に設けられた幅の狭い流れ)の脇に咲いた八重山吹の花に趣があるとしている。『源氏物語、胡蝶の巻』には、光源氏の六條院に造営されたいわゆる四季の庭の情景として次のような描写がある。

まして、池の水に影を映したる山吹、岸よりこぼれて、いみじき盛りなり。

ヤマブキが池岸に植栽され、水面に映る様子とあわせて観賞されていたことがわかる。いずれも架空の物語ではあるが、上記のような水辺を演出する植栽として、実際の貴族の邸宅にヤマブキが利用されていたのであろう。なお、胡蝶の巻の中には、庭ばかりでなく金の瓶にヤマブキを生けて仏前に供える情景が描かれており、室内でも利用されていたことがわかる。

ヤマブキといえば、「な、へやへ花は咲けども…」の歌と共に太田道灌の故事が有名である。ごく身近に植えて、あるいは生えていた植物であり、八重咲き品はほとんど結実しないという共通認識があってはじめて意味を持つ話である。こんなところにも、古人の自然に対する深い眼差しが見て取れる。

4. シロヤマブキ

ヤマブキと似た植物でシロヤマブキ (*Rhodotypos scandens*) という落葉低木がある。花が白色でヤマブキに似ていることからこの名がついたといわれる。ただし、単なるヤマブキの白花品ではなく、同じバラ科ではあるが属が異なる。バラ科の植物はふつう葉が互生し、花卉やがく片は5個である。しかし、このシロヤマブキは葉が対生し花卉、がく片は4個という変わり種である。ヤマブキとはその自生の状況も異なっている。広島、岡山、島根、福井の各県に局地的に分布するほか、朝鮮半島南部、中国中部にも分布がある。石灰岩地などの山野に非常に稀に生育するとされており、現在では全国版レッドデータブックに絶滅危惧 I B 類として記載される種で

もある。庭木としてヤマブキと同様によく使われる植物であるが、自然状況下ではこれほどの違いがある。

広島県東部に帝釈峡という景勝地がある。帝釈峡は石灰岩地として、また珍しい植物の宝庫としても有名なところである。かつて、私は植物を見るため、その溪谷に二度ほど訪れたことがある。そこでは種々の春植物のほか、イワシデ、ケグワ、チョウジガマズミなどの珍しい樹木や、イチョウシダ、ケキンモウワラビなどの石灰岩地特有の珍しいシダなどを見ることができた。しかし、シロヤマブキだけはついに見つけることができなかつた。それが今でも心残りである。いつの日かシロヤマブキの自生個体に出会える日を楽しみにしている。

ヤマブキにしても、シロヤマブキにしても、庭や公園ではごくふつうに植栽されており、単に「花がきれい」というだけで、何気なく見過ごされてしまいがちである。それでもよいだろう。しかし、それぞれの自生地や来歴、現在おかれている状況などを思い浮かべながら見てみると、その風景が時間、空間的な広がりをもって見えてくるものである。ヤマブキは古代からそのような眼差しのもと利用されてきたからこそ、今日なおその花色の鮮やかさが褪せることなく人々に親しまれているのだろう。人と植物のそのようなかわり方を後世に伝えていくことも、園芸に携わるものの役割である。



図1 ヤマブキ (*Kerria japonica*)

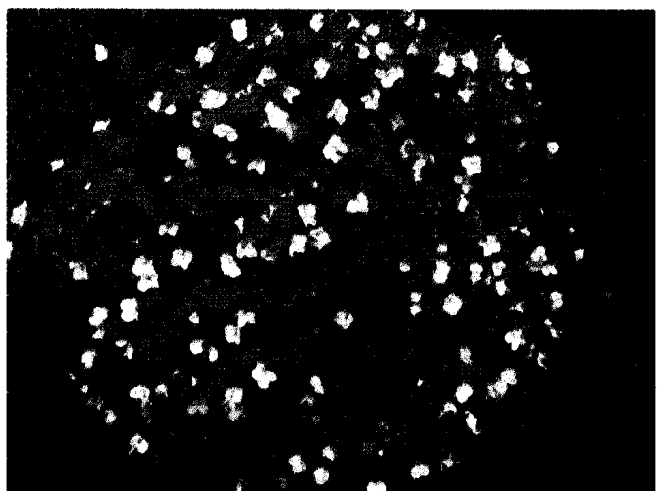


図2 シロヤマブキ (*Rhodotypos scandens*)

参考文献

- 飛田範夫. 日本庭園の植栽史. 京都大学学術出版会. 2002.
- 広島大学理学部附属宮島自然植物実験所. 広島県植物誌. 中国新聞社. 1997.
- 環境庁自然保護局野生生物課. 改訂日本の絶滅のおそれのある野生生物 (8). 植物 I (維管束植物). 自然環境研究センター. 2000.
- 河原武敏. 平安鎌倉時代の庭園植栽. 信山社出版. 1999.
- 佐々木信綱. 新訓万葉集(上巻. 下巻). 岩波書店. 1954.
- 佐竹義輔ほか. 日本の野生植物. 木本 I. 平凡社. 1989.
- 山田宗睦. 花の文化史. 読売新聞社. 1977.
- 山岸徳平. 源氏物語(三). 岩波書店. 1965.